平成19年度流域一体化による水源地域活性化促進調査　報告書

流域一体化への道のり

～課題認識から戦略形成まで～

平成20年３月

国土交通省　土地・水資源局
水資源部　水源地域対策課

はじめに

水資源開発は、ダムの建設等により上流の水源地域に一方的な不利益や不公平感を生じることから、水源地域住民の理解を得ることが不可欠です。このため、下流受益地域が水源地域への理解と協力を進め、ダム貯水池の水質保全・水源林の整備などの水源地域対策を流域一体となって共に行うことが重要となっています。

近年、上下流における流域活動に関心の高い水源地域と下流地域とのそれぞれの行政や行動力のある非営利活動組織（いわゆるNPO）などが互いに連携することについて模索が始まっていますが、一部の住民等の活動に留まっています。今後、流域全体が一体となった水源地域の保全・活性化への取り組みを促進していくことが重要な課題となっています。本調査は、このような状況の中で、上下流の流域活動に関心の高い住民等のみではなく流域活動に関心の高くない層の住民等も流域活動に参加し、上下流全体が一体となり水源地域の保全・活性化を促進するための仕組みづくりについて調査・検討を行ったものです。

水源地域対策課

もくじ

はじめに

調査概要（サマリー）

第１章　本業務の背景と目的

１．本業務の背景と目的 …… 4
２．調査の進め方 …… 6
３．調査対象流域 …… 7

第２章　各流域の取り組み

１．流域一体化のプロジェクトマネジメントのステップ …… 10
２．最上川流域における一体化の取り組み …… 12
３．吉野川流域における一体化の取り組み …… 33
４．五ヶ瀬川流域における一体化の取り組み …… 48

第３章　流域一体化による水源地域活性化へのステップ

１．流域一体化のプロジェクトマネジメントのステップ …… 74
２．各ステップの取り組み …… 76
３．７つのステップの視点 …… 97
４．今後のステップ …… 99

おわりに

参考資料

調査概要（サマリー）

「流域一体化による水源地域活性化促進調査」は、水源地域を活性化するために、水源地域だけでなく下流地域や受益地域も一体となって取り組んでいく仕組みを検討するための調査です。

本調査では、最上川流域、吉野川流域、五ヶ瀬川流域を対象として取り組んでいます。調査では、それぞれの流域ごとにこれまでの水源地域の活性化の取り組みと現状の課題などを把握しました。そして、下流地域や受益地域の力を巻き込みながら水源地域を活性化していくための方向性を見出したところです。

各流域の概況は、以下の通りです。

①最上川流域

最上川流域では、山形県長井市を中心とする水源地域の活性化を考えています。長井市では、長年にわたり、最上川沿いを歩けるように「フットパス」を整備してきました。また、「長井まちづくりNPOセンター」をはじめとする地域住民のネットワークが、地域活性化のために様々な地域づくり活動を行ってきました。

このような積み重ねの中で、地域づくりに関するハードとソフトを一体的にマネジメントしていくことが、水源地域の活性化を図る上で一つの課題でした。また、マーケッティングの観点から、昨今、都市住民などが健康に対して関心を高めていることが、水源地域が持つ良好な環境を活かした健康づくりと結びつくのではないかという議論も重なりました。これらのことから、長井市の行政や長井まちづくりNPOセンターのスタッフたちの議論の中から、「歩く」をテーマとした水源地域活性化の取り組みを進めることとしました。

②吉野川流域

吉野川流域では、高知県嶺北地域を中心とする水源地域の活性化を考えています。嶺北地域は、四国の水瓶ともいわれる早明浦ダムを擁しています。そして、過疎化と高齢化が進み、水源地域の活性化は喫緊の課題となっています。このため、長年にわたり地元だけでなく下流地域や受益地域からも、行政や市民活動団体が訪れ、連携を通じた水源地域の活性化に取り組んできました。嶺北地域には、地域づくりを住民の力で担っていこうと、通称「れいほくＮＰＯ」と呼ばれている「ＮＰＯ法人れいほく活性化機構」が、様々な活動を行っています。しかし、

少ない人口の中でそもそもＮＰＯ活動できる人材が限られていることや、その人材も都市部に比べて相対的に高齢者が担い手となっています。従って嶺北地域の住民だけで、あらゆる課題に着手することは困難です。このような状況の中で、下流受益地域である都市部から新しい取り組みも始まりつつあります。一つは、学生たちのインターンシップです。これは、一定期間、嶺北地域で営農や木材関係の事業を体験し、若者の感性で新しい起業の可能性を見つけていこうとする取り組みです。もう一つは、安全安心な食への関心の高まりです。嶺北地域では、有機農業の取り組みに熱心で、高知県の前知事も支援する中で「有機のがっこう土佐自然塾」といった活動が始まっています。一方、下流受益地域の徳島では、安全安心な食を求めて、様々な活動団体が生まれています。これらのことから、流域で活動している方々により、「食べる」をテーマとした水源地域活性化の取り組みを進めることとしました。

③五ヶ瀬川流域

五ヶ瀬川流域では、宮崎県五ヶ瀬町を中心とする水源地域の活性化を考えています。五ヶ瀬町は、五ヶ瀬川の源流であると共に、熊本阿蘇に隣接した素晴らしい景観を持つ地域でもあります。地理的に九州の中央に位置しており、宮崎県庁まで３時間半、熊本市内まで１時間半、九州の中核である福岡市内までも２時間半ほどです。このような関係から、地域活性化のマーケットは、熊本市や福岡市がターゲットとなります。五ヶ瀬町内では、以前より都市との交流による活性化の取り組みに熱心でした。冷涼な環境を活かした農産物も多く、それらによる都市農山村の交流や農家民泊による人的な交流などに努めてきたところです。これらの活動は、五ヶ瀬町内の複数の地区でそれぞれに取り組んできました。しかし、素晴らしい活動も時代毎に栄枯盛衰の波があります。このような状況の中で、五ヶ瀬町も今後人口が減少していきます。従って、交流人口を多くすることが地域活性化には重要との認識を持っています。特に農家民宿で都市部の若者を受け入れたり、充実した町営スポーツ施設を用いてスポーツ合宿を受け入れたりする実績を持っています。さらに、素晴らしい自然環境を活かした自然学校もＮＰＯによって運営されています。これらのことから、五ヶ瀬町の行政や住民たちの議論の中から、豊かな自然を背景に人と人が関わり合うことで「学ぶ」をテーマとした水源地域活性化の取り組みを進めることとしました。